

鏡に映る自分

岐阜市立岐阜清流中学校 3年

宍井 紗音(しづい あやね)

私は自由なのに気が重かった。その理由は、幼い頃から直感的に「自分は他の人とは少し違う」と思っていたからだろうか。歳を重ねるたびにその思いは大きくなっていた。一方で私は、忙しく働く両親に迷惑をかけないようにと、幼いころから常に気配りをするいい子として生活してきた。だから、自分自身の中に違和感があっても周囲に気づかれないように過ごしてきた。そんな時、「本当の自分らしく」という言葉を耳にし、「本当の自分って何?」という疑問が湧き起きた。同時に、私は周りにあわせているだけで、本音を話せる人はいないと気づいた。自分自身を常に偽っていて、何者でもない気がした。

そこで私は、同調圧力に負けて自分の好みを周りに合わせることをやめた。例えば、制服をスカートからスラックスに変え、長かった髪も短くした。周囲には驚かれたが、私自身の気持ちは少し軽くなった。

しかし、ここでまた、新たな悩みが生まれた。それは、「価値観のズレ」についてである。私は女性だが、「かわいい」より「格好いい」に憧れる。かと言って、男性になりたいと思ったことはない。しかし、周囲から「男性になりたいの?」と聞かれることもあり、うまく説明できず、誤解されたままになることもある。ジェンダー差別をなくそうという動きが世界中で見られるようになったが、そもそも、いずれかのグループに押し込められるようになってしまった。私自身を決めつけられることは辛かった。だから、分かってほしいと求め続けて傷つくよりも、自分の気持ちは自分にしか分からないものだと諦め、人を頼ることをやめた。

私は人より感受性が強いのか、相手の思いを深読みし、自分の思いを抑えることでバランスを取ろうとしてきた。自分さえ我慢すればことがうまく進むのであれば、迷わずそちらを選択してきた。しかし、無意識のうちに小さなモヤモヤが徐々に蓄積していくため、あふれ出した後で自分は限界まで1人で抱え込んでいたんだと思われる。そして、そんな自分自身を把握できない未熟さに嫌気がさし、また自分を責めてしまうということを繰り返してきた。

そんなものがいていた私にとって大きな転機となったのが、今の担任の先生との出会いである。これまででは、私とは正反対の考え方を持つ大人が、「辛かったね。でも、よく頑張ってきたよね」と、私の考えをマイナスからプラスに変えようとたくさん声をかけてくれた。頼りになる存在ではあったが、かけてもらった言葉を受け入れることに一人一倍時間がかかった。

しかし、今の担任の先生は、私の思いに耳を傾け「それでいいんじゃない?」と、ありのままの私を認めてくれた。走りすぎている私に余計なプレッシャーを与えることなく一度立ち止まって周りを見てみたらと提案してくれた。その時初めて、素直に自分は頑張ってきたんだと思った。そして、人からどんな風に見えるのかという鏡に映る自分の姿ばかりを気にして、本当の自分を見失い、周りにも自分にも心を閉ざしていたのではないかと気づいた。

振り返ってみると、私は自分の嫌な部分ばかりとられ、自分を否定し続けてきた。一方で、自分のことを認めてもらいたいという承認欲求を周囲に向け、苦しむことに繋がった。しかし、まずは私が、よい部分も嫌な部分も丸ごと私自身を認め、最大の理解者になるべきだと思った。自分は悩みながらも精一杯頑張っていると認めることが、本当の自分らしく生きる第一歩なのだと気づいた。

これまで、鏡に映る悪い面ばかりを気にしていたが、自分を見つめ続けてきたからこそ様々な人との出会いを通じて、自分の良さに気づくことができ、今の自分に繋がったのだと思う。

今私は、多くの人と知り合いたい、誰かと接するときに、一面だけで評価せず、誰も気づいていない面を見つけたいと思うようになった。これまで多くの人が手を差し伸べてくれたおかげで、悩みながらもたくさんのことにつづき、悩むことは決して悪いことではないと思えるようになった。

私の周囲にも、鏡に映る自分の姿にとられ、悩んでいる人がきっといるはずだ。たくさん悩んできた私だからこそ、これからは、手を差し伸べられる存在になっていきたい。